

- 1 満たされぬままの林檎が置いてある
- 2 山粧ひて旧石器時代かな
- 3 およそ秋の絵にはあらずや秋団扇
- 4 無花果を割りて原始の空のあり
- 5 白樺派同人の選る草の花
- 6 引き返す径にくれなる真弓の実
- 7 天高く馬肥ゆる日の大壁画
- 8 更待の夜の間違ひ電話かな
- 9 夜長していづこへ遷都したらむと
- 10 赤き水筒青き水筒茸山
- 11 とんちんと金屋子神の木の実落つ
- 12 山盛りのコーンフレーク震災忌
- 13 粧へる山に入りたる測量士
- 14 鯖雲の空うめつくす逃避行
- 15 鯛の死光る生鮮食料品
- 16 足名椎（あしなづち）手名椎（てなづち）の踏む煙茸
- 17 振り向き様に漆黒の初冬かな
- 18 外套の見知らぬ人となりにけり
- 19 眠れずに枯鶏頭の立ち尽くす
- 20 枯野ゆく遊牧の民鉄の民
- 21 弥生土器つなぎ合はせてゆく冬野
- 22 白鳥の白新しく来たりけり
- 23 焚火跡つつき大陸移動説
- 24 空のこと考へてゐる冬木立
- 25 暖房の水族館の珊瑚かな
- 26 絨毯に腹話術師の大鞆
- 27 足元にタレースの水涸れ残る
- 28 おでんの具深呼吸してをりにけり
- 29 ひと部屋にひと日暮らすや寒椿
- 30 この中のひとりは鶴となりにけり
- 31 ごつた返して東京の神無月
- 32 三人のヨブの友らのマスクして
- 33 ざわざわと源平合戦図の屏風
- 34 神の旅いろいろ貼つてある手帳
- 35 障子白く鎮護国家のごとく貼る
- 36 田の径に大きな石あり鎌鼬
- 37 マンホールの蓋どつしりと社会鍋
- 38 五百阿羅漢ぬくぬくと冬籠
- 39 冬の蠅銀鉱石を含みゐる
- 40 初夢の喫茶店より始まりぬ
- 41 客席へ役者飛び込む義仲忌
- 42 描かれし星を見上げて初芝居
- 43 湖にくづほれてゆく朝霞
- 44 空遠く椿の坂を下りけり
- 45 城の鬼門の淡雪に濡れてゐる
- 46 春泥の重く囲むや王の墓
- 47 春シヨールまばたきをするそのときに
- 48 水玉を散らし白鳥帰りけり
- 49 大木を神話の国へ流しけり
- 50 春の山に梯子を架けてみんとする

- 75 村ひとつ瓦葺きなり鑑真忌
- 74 小満やみつちり詰めて爪楊枝
- 73 鈴蘭の空想の音響きけり
- 72 溜池の幾つもあるや健吉忌
- 71 一文字空けて改行をして白蓮
- 70 うろ覚えなる鞆のある広場
- 69 鱗あり鱗あり鱗ありにけり
- 68 春天に石落ちてくる穴がある
- 67 子規堂の腹いつぱいの椿かな
- 66 石鹼玉ミノタウルの迷宮に
- 65 錦丸新栄丸や風光る
- 64 土深く黄泉醜女(よもつしこめ)の目借時
- 63 舟唄を北窓開けて迎へけり
- 62 ポタージュ混ぜて春遅々と春遅々と
- 61 逃水に落として仕舞ふ電車賃
- 60 野遊の野をダイニングテーブルに
- 59 つちふるやメリーゴーランドの電飾
- 58 会ひたくて蝶がいくつもいくつも飛び
- 57 大きすぎる亀鳴く声の大きすぎる
- 56 芝居がかりて富士山の笑ひけり
- 55 橋あらば橋わたるべし花の客
- 54 木の椅子の固くありたる大試験
- 53 とんがつてゐるものもあり春帽子
- 52 フェーン吹くコロツケ入れし紙袋
- 51 フラスコの中にゐるなり花粉症
- 76 摩訶般若波羅蜜多心経衣更
- 77 神籤よりお多福出でて桐の花
- 78 妖怪に名の一つつつ竹落葉
- 79 三重之塔に住みたる蝸牛
- 80 石段の石のひとつは墓
- 81 バナナむき妖怪の国神の国
- 82 革表紙のイングリッド史儂美しく
- 83 なめくちの進みし跡の美文なる
- 84 呪術師のうすばかげろふ放ちけり
- 85 ぬるぬると山椒魚の不服かな
- 86 海に動くは船虫と黒船と
- 87 恋をしてゐる夜濯の音がする
- 88 まくなぎやここに集まる切支丹
- 89 くらぐると明朝体の昼寝かな
- 90 炎昼や畑の中に人がゐる
- 91 隧道の大暑に穴をあけてゐる
- 92 水中りして仏陀伝読み了へる
- 93 ライオンの像ライオンのまま晩夏
- 94 雷を十二神将とりかこむ
- 95 騙されてもいい大西日の綺麗
- 96 竹林を海亀のゆく心地かな
- 97 あれは全部嘘だつたんだ揚花火
- 98 木槿垣真昼に暗き部屋のあり
- 99 新豆腐水に浮かびて触れ合はず
- 100 寝返りを打つかもしれぬ榎檀かな